

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の句式編

【第4回】部分否定

第3回で否定の基本をマスターした諸君、今回は部分否定について学習するぞ。だいたい漢文がわからなくなる奴って、ここで挫折するんだよな。君らはちゃんとしてこないとだめだぜ。

1. 部分否定とは？

部分否定とか一部否定とか、そういわれる否定文、まずはその定義からスタートしようぜ。

副詞は基本的に述語を修飾するだろ？

たとえば「不食」なら、否定副詞「不」が述語動詞「食」（食べる）を否定修飾して、「食べない」という意味になる。

これはただの否定文だよ。

ところが、「不」が修飾する述語動詞が、別に何らかの修飾を受けていると、部分否定を表すことがあるんだ。

ん？ よくわからないって？

えっとだな、たとえば「不」が「常食」（常に食べる）を修飾したらどうなる？

つまり「不常食」はどういう意味になるんだ？

これがちゃんとわかったら、部分否定はほとんど理解したも同然だよ。

「不」が否定修飾するのは、「食」（食べる）じゃないよ、「常食」（常に食べる）だろ？

もつとはつきり言えば、「不」は「常に食べる」ことしか否定してないんだよ。

ということはつまり？ そう、「たまたま食べる」ことは否定してないってことね。

だから「不常食」は、「常には食べない」って意味になる。

部分的に否定してるから、部分否定といわれるわけ。

まとめると、**部分否定は、否定する語によって否定される内容が、何らかの修飾を帯びている時に起こる、これに尽きる！**

今を図解すると、次のようになる。

修飾

不常食。

…「不」が「常に食べる」のみを修飾するから部分否定

これは「常には食べない」ってことだから、次のように訓読するんだ。

不_ニ常_一食_{ラバ}。

▼常_ニには食_{ラバ}らはず。

▽常に食べるとは限らない。

もしこれを「不_ニ常_一食_{ラバ}」と読んでしまうと、たとえば書き下した時「常に食らはず」になってしまって、部分否定だとわからないだろう？

だから、「常には」と、部分否定だとわかるように読むわけさ。

ん？ 訳が「常に食べるとは限らない」ってあるぞだって？

いいところに気がついたね。

実は「常には食べない。」で十分に部分否定だってわかるのに、なんで学校漢文では「常に食べるとは限らない」なんておかしな訳し方をさせるのか？と思うだろう？

これはためぐち先生の想像なんだが、部分否定ってよくテストとかで訳をさせるじゃないか。

その時、「常には食べない」では「常には食らはず」とほとんど同じで、訳したことにならないって思うからなんじゃないかな？ わかんないけどな。

でも、ほんと迷惑な話だよな、「常には食べない」で十分わかるのにさ。

ところで、「不常食」の語順をちよっといじって、「常不食」にしたらどうなる？

ふふふ…さすがにためぐち先生の生徒たち諸君は、もっわかっただみいだね。

副詞はその下というか後を修飾するんだから、副詞「常」が修飾するのは「不_{ラバ}食_{ラバ}」（食べない）だもんな。

つまり、図解すると次の通り。

常_ニ不_一食_{ラバ}。 … 「常」が「食べない」を修飾するから↓常に「食べない」

これは「常に食べない」になる。

「食べる」ことそのものが全て否定されてるんだ。

だから、**全部否定**というんだよ。

この日本の高校生が悩む「部分否定と全部否定」ってのは、実は中国では全然問題にならないらしい。

そんなの上から順番に読んで発音してる中国人にとっては、語の修飾の関係からわかりきったことだからだよ。

部分否定と全部否定は、要するに否定の副詞「不」が他の副詞（ここでは「常」）との関係で、何を否定修飾しているかという語順の問題に過ぎなくて、「漢文では構造的に修飾語が被修飾語の前に置かれる」ということがわかっていれば、「不常食」が部分否定、「常不食」が全部否定になるのは当然だといわ

けや。中国の人にとっては、わかりきったことのはずなのに、我々日本人が悩むのは、語順を見ずに訓読で漢文を理解しようとしているからなんだよ。

家貧、不常得油。

▼家貧しくして、常には油を得ず。

▽家が貧しくて、いつも（本を読む灯りの）油を得られるとは限らない。

部分否定の説明というと、必ず例に出されるのが、これだね。

これが部分否定になるのは、もうわかるよね？

「不」が否定修飾するのは、「常得」（常に得る）。

つまり、「常に油を得る」ことだけを否定してるんだ。

たまくに得ることまでは否定してない。

だから部分否定になるんだね。

兩虎共闘、其勢不俱生。

▼兩虎共に闘へば、其の勢俱には生きず。

▽二頭の虎が共に戦えば、そのなりゆきとしては共には生きない。（＝どちらか一頭は死ぬ。）

「兩虎」ってのは「二頭の虎」ってこと。

「兩」はいつも両方っていう意味とは限らないんだぜ。

「二」の意味でも用いられる。

さて、これも部分否定になるんだが、わかるかい？

「不」が否定するのは「俱生」（共に生きる）だけだろ？

ってことは、片方生きることまでは否定してない。

つまりどちらか一方は死ぬってことになるわけ。

両方とも死ぬって意味にはならないぜ。

全部否定なら「俱不生」（ともに生きない＝両方とも死ぬ）になるだろ？

この場合も全部否定との違いを示すために、訓読では「俱には」って「は」を送って読むんだ。

◎ポイント!...部分否定は、否定する語(主に否定副詞)によって否定される内容が、何らかの別の修飾を帯びている時に起こる。

不 _二 常 _一 A。セ	▼常 _二 には A せず。	↑↓	常 _二 不 _一 A。セ	▼常 _二 には A せず。
	▽常に A するとは限らない。			▽常に A しない。
	(部分否定)			(全部否定)

不 _二 俱 _一 A。セ	▼俱 _二 には A せず。	↑↓	俱 _二 不 _一 A。セ	▼俱 _二 には A せず。
	▽ともに A しない。			▽ともに A しない。

・部分否定であることを示すために「常には」「俱には」と「は」を送る。

部分否定というのは、否定副詞が修飾する内容が、別の副詞なんか修飾されてる時に起こるわけだから、他にも、

不_二甚_一 A。セ
▼甚_二だしくは A せず。
▽徹底的に A するわけではない。

不_二尽_一 A。セ
▼尽_二くは A せず。
▽すべて A するわけではない。

とか、色々ある。

要は語順の問題なんだから、丸覚えしようと思わずに、部分否定がどいつの時に起こるのかを、構造的にちゃんと理解することが大切だよ。

2. 「不_二必_一」と「未_二必_一」の違い

部分否定の基本がわかったところで、ちょっと気をつけてほしい部分否定をいくつか紹介しよう。まずは「不_二必_一」と「未_二必_一」の違いだ。

勇者 不_二必_一有_レ仁。

▼勇者は必ずしも仁有りけり。

▽勇者は必ずしも仁徳があるわけではない。

否定副詞「不」が否定修飾しているのは「必有」（必ずもつ・必ずある）だよな？

だから、「必ず人徳がある」とは限らない、「必ず人徳がある」わけではない、と部分的に否定することになるんだ。

人徳がある勇者だっているからな。

もし、「必不有仁」だったら、副詞「必」が「不有」（ない・もたない）を修飾するから、「絶对人徳がない」という全部否定になる。

理屈は「不常」「不俱」の時と同じだね。

読み方で注意してほしいのは、「必ずしも」と読んで、「必ずは」とは読まないってこと。

「お金がないからといって、必ずしも不幸ではない」って言い方、君らもするだろ？

日本では古くから副詞「かならず」に副助詞「し」と係助詞「も」をつけて「かならずしも」の形で、後に打ち消し表現を伴い、部分否定を表す言い回しがあるんだよ。

だからそれを用いるんだ。

今説明した「必ずそうなると決まっている」ことを打ち消す部分否定を「**必定の否定**」っていうんだ。

「必ずしもAするわけではない」とか「必ずしもAするとは限らない」って意味を表す表現だね。

ところが、この「不必」で注意しなきゃならないのは、必定の否定とは別に、「**必須の否定**」を表すこともあるという点だ。

必須の否定は、「くする必要がある」の否定で、「くする必要がある」という意味。

これは部分否定ではないのだけれども、同じ形で違う意味を表すことがあるから厄介なんだ。

升沈 応已定、不必問君平。

▼升沈は応已に定まるべし、必ずしも君平に問はず。

▽（人生の）浮き沈みはきつととつくに定まっているであろうから、君平（＝漢の時代の古い師範の）字（あな）に問う必要はない。

「必」には、必定とは別に、必須を表す働きがあるんだが、それを「不」で打ち消して「不必」の形になると、必定の否定とは別に、必須の否定として「くする必要がある」という意味にもなるんだ。

同じ内容は「不須くくする必要がある」（で表現できるんだが、唐代くらいからこの意味で「不必」が用いられるようになり始めて、現代中国語ではもっぱら「不必」は必須の否定のみを表すようにな

ったんだ。

だから、比較的新しい時代の漢文では要注意！

必定の否定なのか、必須の否定なのかを見極めないといけないよ。

右の例も、「必ずしも占い師の君平に問うとは限らない」なんて訳すなよ、「問う必要はない」って意味だからな。

必定の否定と必須の否定で「必」の読み方を変えてくれればいいんだが、残念ながら日本では伝統的に同じ読み方をしてるんで、そこは致し方がない。

◎ポイント……「不必」は、必定の否定を表す場合と、必須の否定を表す場合があるので、文脈から判断しなければならない。

不_ニ必_スA_{。セ}

▼_{かなら}必ずしもAせず。

▽①必ずしもAするわけではない。

必ずしもAするとは限らない。(必定の否定) ↑部分否定

②Aする必要はない。(必須の否定) ↑部分否定ではない

「必」で修飾された述語、つまり「必A」(必ずAする)を否定する表現には、「不必」とは別に「未必」というのがある。

これは「不必」がもつ必定の否定と必須の否定のうち、前者とほぼ同じ意味を表すんだ。

若_ッ 桀_レ紂_ハ 不_ニ遇_ハ 湯_ハ 武_ニ 未_ニ 必_ス 亡_レ 也_{。ヒ}

▼若し桀紂湯武に遇はずんば、未だ必ずしも亡びざるなり。

▽もし(夏王朝最後の) 桀王と(殷王朝最後の) 紂王が、(夏を滅ぼした殷の) 湯王や(殷を滅ぼした周の) 武王に出会わなければ、必ずしも滅びるとは限らなかつたのである。

「桀紂」ってのは、夏の桀王と殷の紂王のことで、2人とも各王朝最後の暴君で名高いから知ってるだろ？

桀王の肉山脯林(山のように肉を積み、林のように干し肉を並べる宴会)と紂王の酒池肉林(酒を池に満たし肉を林のように並べる宴会)なんていって、どちらも似たような贅沢三昧をしたし、諫言する家臣を殺したり、美女に溺れたりした。

そこまで本当にひどかつたのかは、美のところ疑わしいんだが、一応中国の思想や文学、歴史では暴君として位置づけられてるんだ。

ところで、その夏の桀王、殷の紂王を滅ぼしたのは、それぞれ殷の湯王、周の武王なんだが、桀王、紂王がこの湯王、武王に出会ってなかったとしたら…というのが右の例文になる。

さて、この「未^ダ必^ス A^セ」を説明するためには、まず「未^ダ」という否定副詞の働きについて、否定の基本のところで述べたことをさらに深めておく必要がある。

「未^ダ」ってのは、終結が基本義の「已^ス」（すでに）くした（ ）の打消を表すよな？
つまり「まだくしていない」って意味。まだ終結してないわけだ。

だから、未実現を表す否定副詞となる。

たとえば、「君、このことについてもう学んだかい？」って聞かれたとする。

実のところ、まだ学んでない。

その時、「不^バ学^バ」と答えるのと「未^ダ学^バ」と答えるのって、どう違う？

え？簡単だつて？そう、「不^バ学^バ」は「学ばない。」「未^ダ学^バ」は「まだ学ばない。」だよな？

でも、じゃあ「未^ダ学^バ」は、将来学ぶということを保証してるとは限らないだろ？

おや？きよんとしてるな。

つまり、「不^バ学^バ」と言ってしまうえば、ある意味「学ぶ気はない」という表現者の意志を示すことになるけど、「未^ダ学^バ」と言えば、「将来学ぶかもしれない」という含みをもたせたことになるじゃないか。

だから、「未^ダ」には、未実現の意味を表すことを利用して、「不^バ」のようにはっきり打ち消してしまうことを避け、婉曲に打ち消す働きもあるんだよ。

おや？どうやら先生の言いたいことがわかったらしいな。

そう、「未^ダ必^ス A^セ」は、「不^バ必^ス A^セ」の婉曲的な表現だと言われるんだ。

つまり、「不^バ必^ス A^セ」だと「Aするとは限らない」と言い切る感じになるんだが、「これまで見てくると必ずAするとは限らないようだ」と、はっきり言い切ることを避けた表現なんだね。

だから、言いたいことは実は「不^バ必^ス A^セ」と同じなんで、「まだ」をつけて訳さずに、「必ずしもAするとは限らない」と「不^バ必^ス A^セ」と同様に訳すんだ。わかったかな？

◎ポイント…「未^ダ必^ス A^セ」は、必定の否定を表し、必須の否定を表さない。

未^ダ必^ス A^セ

▼必^カずしもAせず。

▽①必ずしもAするわけではない。

必ずしもAするとは限らない。(必定の否定)

・「まだ必ずしも…」と「まだ」をつけて訳さない。

3. 「不復」と「無復」

「もうくしない」とか「二度とくしない」って日本語があるだろ？

たとえば「君とはもう付き合わない」とか「この料理は二度と食べたくない」とかさ。

この「もうくしない」「二度とくしない」にぴったりあてはまるのが、漢文では「不復^タ」^セって表現なんだ。

伯牙破^リ琴^ヲ絶^レ絃^ヲ終身不^レ復^タ鼓^セ琴^ヲ。

▼伯牙^{はくが}琴^{こと}を破^{やぶ}り絃^{げん}を絶^たち、終身^{しゅうしん}復^また琴^{こと}を鼓^こせず。

▽伯牙は琴を壊し絃を断ち、生涯二度と琴を弾かなかった。

ためぐち先生思えらく、およそ漢文にある逸話の中で一番ロマンチックなお話は、この伯牙絶絃だね。

伯牙つてのは、琴の名手だったんだ。

そしてその親友の鍾子期^{しゅうしき}は、彼の弾く琴の音色を実によく聴き分けたんだ。

伯牙がどんな気持ちで何を表現しようとしているのかってね。

流水をイメージすればそれを、高山をイメージすればそれをつてふうに、ちゃんとわかったんだよ。すごいだろ？

ある時、2人が泰山^{たいさん}に出かけて急な雨にあったんだ。

崖の下で雨宿りして、伯牙が悲しい気持ちで琴を手に、しとしと降り続く雨のイメージを曲に、そして崩

れ落ちる山のイメージの曲へと弾き続ければ、鍾子期はそのたびごとに伯牙の琴の音色を聴き分けて彼の思

いを受け止めたんだ。

そしたら伯牙はたまらなくなつて琴を置いて嘆じた、「いいなあ、いいなあ、君の聴き方は。君が僕の思
いだと想像するものは全部僕の心そのものだよ。僕の音色は君から逃れようもない。」ってさ。

ロマンチックだろ？

若い頃この話を読んで思ったね、もし鍾子期が女性だったら、2人はどうしようもない恋に落ちただろう
なつてな。(おい！みんな引かないでくれ…)

で、その鍾子期は死んじゃった… 伯牙はもう自分の琴を聴かせる価値のある人なんていないって、琴の
絃を断ち切ったんだ。

そして「生涯二度と琴を弾かなかった」。

この「二度と琴を弾かない」を、漢文では「不^タ復^タ鼓^セ琴^ヲ」って表現するんだ。

「鼓^ス」は、楽器を演奏するって意味の動詞。

打ち鳴らすから転じてはじく、かき鳴らすって意味になったんだ。

ところで時々その否定「不鼓」を「鼓さず」って読むやつがいるんだが、もちろん「鼓せず」だけ。

「鼓す」はサ変動詞として訓読してるからな。

え？ぴんと来ない？

じゃあ君は「テニスしない」ってのを「テニスせず」じゃなくて「テニスさず」って言うのかい？

ところで、この「不_レ復_ハ A」の形は、必ずしも「一度目は A したが、二度目は A しない」って意味を表さないんだ。

黄鶴 一去不復返。

▼黄鶴 一たび去り復た返りし。

▽黄鶴は一度飛び去って二度と帰らない。

たとえば右の例の場合、黄鶴は忘れ物でもして一回帰ってきたのかい？ まさか！
もちろん行ったつきりだろ？

こんなふうに一度目が存在しない場合もあるんだ。

だから、巷の参考書なんかでは、この用法を「強い否定」で「決してくしない」という意味だなんて説明されてたりする。

でも、「二度と帰らない」のどこが強い否定なんだい？

そもそも「決して帰らない」と同じ意味なのかい？

この「不復」はもともと再現の否定を表すんだが、そこから転じて「それつきりくしない」「元のようにくしない」って意味を表すようになったんだよ。

最初に言ったら？ 日本語の「もうくしない」「二度とくしない」は、「不復」の訳にぴったりあてはまるって。

「もうくしない」「二度とくしない」は必ずしも「一度目はくした」という意味を含まないじゃないか。

「黄鶴は一度飛び去って二度と帰らない」という日本語を、一度目は帰ってきたという意味だと思う日本人がどこにいるんだい？

だったら「二度と帰らない」と訳して何でダメなんだい？

馬鹿も休み休み言えと言いたいところだよ。

ところで、この「不_レ復_ハ A」は、今述べたような例外的な意味を表すこともあるけど、部分否定には違いないんだ。

だから、ことさらに「復_ハ不_レ A」という形を設定して、「不_レ復_ハ A」は「二度めは A しない」で部分否定、「復_ハ不_レ A」は「またもや A しない」で全部否定だと説明する先生があるんだな。

例文まで用意して、「不_レ復_ハ得」と「復_ハ不_レ得」では意味がどう違うかって、テストにまで出したりする。

でもな、実はこの「復_ハ不_レ A」の形ってのは、まずほとんど例がない。

そりゃ探しまくれればないわけじゃないだろうけど、あっても「復」の意味が「それでもなお」という意味であつたりして、いわゆる全部否定の意味で用いられてるわけじゃない。

このためぐち先生にして、普通に漢文読んで出会ったことなんかないだよ、「復不_レA_セ」の形って、ほとんど例のない形を覚えたって仕方ないだろ？

それより頻繁に使われる形を覚えなきゃ。

要するに結論、「不_二復_タA_セ」は「二度とAしない・もうAしない」と訳せば十分。

それ以外の余計かつ怪しげな知識はいらんってことだよ、いい？

◎ポイント……「不復」は、再現の否定を表すのが基本。どの例も「二度とAしない・もうAしない」と訳せばよい。

不_二復_タA_セ

▼復_マたA_セぜず。

▽二度とAしない。・もうAしない。

- ・必ずしも「一度目はAしたが二度目はAしない」という意味を表さない。
- ・「復不_レA_セ」が全部否定を表す例は、ほとんど用例がない。

不_二穀_一無_二復_タ戦_ハ一_レ矣。

▼不_レ穀_マ復_タた戦_ハふ無_シ。

▽私はもう戦うことはない。

「不穀」ってのは、諸侯が自分をへりくだつていう謙称だよ。「私」って意味。

これが「不穀不_二復_タ戦_ハ矣」なら、さっきの形だから「私はもう戦わない・私は二度と戦わない」という意味なんだが、さて、中国ではこの「無復+動詞」も「不復+動詞」と同じ意味だと説明されてる。つまり、「無」を「不」と同じく否定副詞とみなしていることになるな。

でも、もともとこの「無復+動詞」の形をとること自体が少なく、
「無復+動詞+者」の形が普通なんだよ。

とていつことはどういつのこと？

「者」は名詞句を作る働きがあるじゃないか？

そう構造助詞としての働きだよ。

つまり、「動詞+者」は「～するもの・～すること・～する人」という意味の名詞句だろ？

とすれば、この「無復+動詞+者」は要するに存在文なんだよ。

すなわち述語「無」+目的語「復+動詞+者」の形によってことになる。
たとえば、その形をとった例で説明すると、

存在主語 述語 目的語

南秦無_二復_一反_二者_一。

▼南秦に復た反く者無し。

▽南秦州にもつ反乱を起こすものはいなくなった。

の構造になるわけだ。これはまさか「無復」を複合の否定副詞とみなすわけにはいかないよ。

「無」は非存在を表す紛れもない動詞だからね。

そう考えると、さっきの「不殺無_二復_一戦_二矣_一」も、「不殺無_二復_一戦_二者_一矣」（私はもう戦うことはない）の「者」が置かれたい形と考える方が自然で、やっぱり存在文だと思っただな、ためぐち先生は。

ただし、この例の場合は、「不殺」は存在主語ではなく、主題主語だけだな。

だから、「無復+動詞」も「不復+動詞」と同じだとして「もうくしない・二度とくしない」と訳すよりは、訓読通り「もうくするもの〔こと〕はない・二度とくするもの〔こと〕はない」と訳す方がいいと思う。

実際、さっきも言ったとおり、「無復+動詞」の形をとること自体が少ないんであって、むしろ「無復」の後には名詞や名詞句が置かれるのが普通なんだからね。

境内無_二復_一盜賊。

▼境内に復た盜賊無し。

▽領地内にもつ盜賊はいなくなった。

これが「無復」の後に名詞が置かれる例だよ。

「復」は副詞なんで、名詞を修飾するというのは何か違和感があるんだが、意味的には非存在を表す述語動詞「無」の目的語「復+名詞」が「なりなる〜」「もとのようなく」「これまでのようなく」という名詞句になるんだろつな。

「復盜賊」も、「なりなる盜賊」「なりく盜賊を続けるもの」「へらいの意味だろつ。

◎ポイント……「無復」は、「もとのようなくするもの」「なりくするもの」の存在を否定する。

無_二復_一 A_{。スル}

▼復たAする無し。(Aは動詞)

▽二度とAすること「もの」はない。・もうAすること「もの」はない。

無_シ復_タ A。

▼復_マた A 無_シ。(Aは名詞)

▽二度とAはない。・もうAはない。

さつき「無復+動詞」の形をとることは少ないって言ったよね？

でも、厳密に言うくと、「無復+動詞」の形で「二度とAすることはない」という意味を表す例は少ないと言っべきなんだ。

え？どっぴりしたことか？

それはな、そういう意味を表す例は少ないが、違う意味を表す例ならあるってことなのさ。

願_{ハクハ}君_ミ無_シ復_タ出_{ラス}口_ニ。

▼願_{ハクハ}はくは君_ミ復_マた口_{クチ}に出_イだす無_ナかれ。

▽どうか君二度と口にしなさい。

右の例は、確かに「無復+動詞」の形をとってるけど、意味は禁止だよ。

「もうくするな」って意味。

この場合はもう「無」が非存在を表す動詞とは考えにくいね。

「無」は禁止を表す否定副詞だからな。

え？頭がごちゃごちゃしてきたって？

いいかい？ 思い出してくれ、古典中国語の品詞はその働きで決まるんだよ。

この漢字はこの品詞って決まってるわけじゃないんだ。

動詞のように働いてるなら動詞だし、副詞のように働いてるなら副詞なんだよ。

「無復」は、「ここでは「もうくするな」という禁止の意味を表す複合副詞として述語動詞「出_{ラス}」(出_ス)を修飾してるんだ。

そしてこれが大事なんだが、「無復+動詞」の形は、この禁止で用いられることが多いんだ。

え？どうやって区別したらいいのか？

だろ？

「おまえ、もうやめろよー」とか「あんた、もう黙っときー」とかさ。

だから、右の例のように、2人称代詞が前に置かれることが多い。

いつもそうだとはいえないけど、これが重要な手がかりになる。わかったかい？

◎ポイント！…「無復+動詞」は、禁止を表すことが多い。

無^{カレ}復^タ A^{スル}

▼復^マたAする無^ナかれ。(Aは動詞)

▽二度とAするな。・もうAするな。

・二人称代詞「君」「汝」などが、前に置かれることが多い。

4. いろいろな部分否定

部分否定は、これまで紹介したような形がよく教科書や参考書に取り上げられてる。

仮に部分否定を厳密に定義して「述べられる事実がすべてのものに対して成り立つとは限らないとする否定」だとすれば、内容的に「すべてであるとは限らない」という意味を表す表現が部分否定の基本になるね。

でも、実際には「多くは語らない」「深くは理解しない」「長くは生きない」などの内容の文を、部分否定に含めて説明されることがあって、どのような表現までを部分否定とするかは、はっきりしないところがあるんだ。

最初にこう言ったよな？「部分否定は、否定する語によって否定される内容が、何らかの修飾を帯びている時に起こる」って。

構造的にはそうなるわけだから、「多くは語らない」「深くは理解しない」…だって部分否定の一種になるんだよ。

漢文では、否定を表す「不」などの副詞が、その後の述部全体を修飾するわけだから、修飾される内容が他の副詞や形容詞なんかで修飾されていけば、必然的に部分否定またはそれに類した意味を表すことになっちゃうよ。

だからその語順の理解がなにより大切で、何をもって部分否定とするかにあんまりこだわる必要はないね。

さて、部分否定、あるいは部分否定に類する形には、これまで取りあげて説明したものの他にも、次のようにさまざまな形があるんだぜ。ずらっと並べてみようか。

・不^{トモニハ}同^{ニハ} A^セ

(ともに)は「同じようには」・同時には「Aしない。」

・不^ニ尽^ニ A^セ

(すべて)はAしない。・全部Aするとは限らない。(

・ 不_二多_一 おほくハ A_一。セ
(多くはAしない。)

・ 不_二両_一 ふたツナカラハ A_一。セ
(両方はAしない。)

・ 不_二再_一 ふたたびハ A_一。セ
(二度はAしない。・ふたたびはAしない。)

・ 不_二甚_一 はなはダシクハ A_一。セ
(徹底的にはAしない。)

・ 不_二太_一 はなはダシクハ A_一。セ
(はなはだしくは「ひどくは」Aしない。)

こんなふうにあ、いろいろとあるわけなんだが、否定副詞「不」によって否定されている内容Aが、「同」「尽」：なんかの修飾を受けてるってことを、しっかり確認しとけよ。

以上で、君らが否定の形でいつもつまづく部分否定の講義は終わりだよ。次は、2つ目の大きなハードル、
二重否定だな。
お疲れさん。